国税庁長官賞

「税金が公平であるべきだと思う理由」

足立区立 第十四中学校

三年　仙田　あさひ

一昔前、平等と公平のどちらがより良いか二つの絵を巡って論争が起こった。その絵とは、柵の向こうで野球をしている様子を背の高い男の子、中くらいの男の子、背の低い男の子が見ている。近くには三つの箱があり、中くらいの子は一つ、低い子は二つ箱がないと見えない、というものだった。三人に一つずつ箱を与えることを機会の平等、すなわち「平等」といい、背の高い子の分の箱を背の低い子に分けて全員が観戦できるようにすることを結果の平等、すなわち「公平」といった。私はこの平等と公平の観点から税金を見ていきたいと思う。

日本の税金には、同じ能力・条件の人には同じだけ課税する水平的公平と、所得の多い人がより多く負担する垂直的公平の二つの原則がある。水平的公平には主に消費税が挙げられ、平等といえる。一方、垂直的公平には主に累進課税がある所得税が挙げられ、これらは公平といえるだろう。

また、都市部は人口が多いため財政の多くを地方税で賄うことができるが、過疎化が進む地方では、財政格差を正すための地方交付税交付金で補う必要がある。補うためのお金も、所得税や消費税の一部から成っている。今年の四月からは子ども・子育て支援金という新たな制度も段階的に導入された。既にある医療保険料に上乗せする形で徴収され、それらは児童手当の拡充やこども

誰でも通園制度等に使われるのだという。しかし、公的医療保険に加入している全世代が対象のため、独身者、子供のいない世帯からは、直接的な恩恵がない、と不満の声が多く上がった。最近ではアメリカとの関税問題もある。

こうした税金に関する報道で、税金が多いな、と感じ、「税」についてマイナスなイメージがある人も少なくないだろう。しかし考えてみてほしい。なぜ私たちは学校に通えるのか。なぜ日本は治安がいいのか。なぜ災害が起きても復旧できるのか。私たちは税金を「払う」ことばかりに近視眼的になってしまい、受けている恩恵を忘れているのではないだろうか。私は、税金は公平であるべきだと思う。生活に困らない程度の収入を得ている人たちの税金によって、生活が苦しい人たちのサポート・支援ができるのだから。

今後、社会保障や防衛費等で私たちの世代の負担は増えていくだろう。しかし、学校や警察、消防が税金で動いていることを忘れてはいけない。私たちのあたりまえは、世界のあたりまえではないのだ。先程述べたように、日本は公平という名の助け合いで成り立っているのである。だからこそ、私たち国民はもっと税金に関心を持ち、税金の使われ方、社会への還元について積極的に意見を伝えていくべきだと思う。少子高齢化と物価高で税金論争が激しい今、快く納められる税のあり方についてよく考え、実直に社会貢献できる大人になりたい。